

烙淫の姫巫女8

RAQUIN NO HIMEMIKO

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

presented by
STUDIO WALTZ



ネオジャパネスク・エロス

淫獣聖戦

天津姉妹凌辱本



presented by

STUDIO WALTZ

烙淫の姫巫女8

「行くよ！お姉ちゃん！」

決戦の地に立つ天津姉妹。

その眼前には無数の淫鬼どもの軍勢が広がっていた。

（……麻衣）

亜衣は改めて麻衣を見た。

普段は笑顔がチャームिंगで時におっちょこちよいなところもある妹だが、今は違ってみえる。

穏やかな雰囲気の中に、強大な戦力を秘めているのが分かる。

その名に恥じぬ一騎当千の羽衣軍神の姿がそこにあった。



姉妹の巫女奉仕



鬼獸淫界の支配する世界で姉妹は、一般の男たちに巫女としての奉仕を強制されていた。

「麻衣にだけは手を出さないで……」
今はこうするしかない。

妹を守るためには、自分が相手をするしかなかった。

（ああ……でも……こんな……）

何という淫らな姿を晒しているのか。ともすれば、崩れそうになる自分を励まして、念を押す。

「や……約束よ」

アソコに広がる快感に今にも流されそうになる。

（麻衣さえ無事なら……）

か細い希望にすがりつつ、亜衣は必死でピストン運動に耐えた。



しかし、亜衣の懇願も虚しく、麻衣もすでに別の男に抱きすくめられていた。

「ああ、お許し下さい……」

シユルシユルと緋袴が脱がされてゆく。

「今日は、こんなこととはしな……んんっ！」
唇を塞がれ、言葉が途切れる。

「んっ……うふ……や、やめ……んん！」

男の舌が麻衣の口の中でうねる。

「んんっ、ん……ふあ……はあはあ……」

やがて麻衣の抵抗は弱まり、声に甘い吐息が混じり始めた。

「はあ……んむっ、はうむ……んふんっ」



その男は麻衣を抱いた後、次々と仲間を部屋に呼び入れた。たじろぐ麻衣。

凌辱の宴はまだ始まったばかりだった。

数時間後――

「うう、どうか、少し休ませて……」

「全員のを搾り取るまで、ダメだ」

「ああ、そんな……んふっ……むっっ」

やがて解放された亜衣が目にしたのは、四人の男を相手にしている麻衣の姿だった。

姉妹の敗れた世界編

鬼獣淫界に敗れた姉妹は、その後淫鬼どもに徹底的に犯された。

「淫敵退散」などと恥ずかしくて二度と口にできぬよう、頭と身体に人外の快楽が刻み込まれてゆく。鬼獣淫界のあらゆる淫鬼どもが姉妹の極上の美肉を堪能した。

ともすれば堕ちそうになる麻衣を亜衣は懸命に励ました。しかし相手は、単にセックスが上手いだけの男ではないのだ。

姉妹は強靱な精神力で、淫界の性技によく耐えたと言っている。だが、若い身体はどうしようもなく反応してしまうのであった。



「淫蛸(みだらだこ)」
鬼獣淫界に生息する水棲生物。
淫蛸の分泌する粘液は性感を異様に過敏にし、さらに
淫鬼たちの子を孕みやすくするという効果があった。

「くっ……やめる……この化け物!」

半透明の淫蛸の触手は意外な力を秘めていた。
亜衣の股が力で押し広げられてゆく。

「うっ、くっ……、こ……こんな……ヤツに……」

小刻みに震える両膝頭がゆっくりと離れてゆく。

露わになった亜衣の秘部に触手の先端が触れる。

ヌチャ ヌチュリ チュツプ

粘液まみれの触手が丁寧に大陰唇をくつろげ、
ピンクの肉穴に粘液を塗り込んでゆく。

その効果はすぐに現れた。

今や粘液とともに亜衣自身の分泌液が秘肉を濡らしつつあった。

触れられたところ全てがひどく敏感になっている。

うなじも耳も胸もアソコも足の指の間まで……

恐ろしいばかりに感度が高められてゆく。

（「こ」のままじゃ……、私……）

淫蛸の愛撫は勢いを増す一方だった。

麻衣は膣の中でさらに膨らもうとするペニスを驚いた。

（ま……まだ大きく……なる）

いっぱいに広げられた膣。「一番奥まで届いている。

乱暴な動きだが、不思議と痛みはなかった。

快楽の波に飲まれる自分がいる。

（せめて……淫乱と……思われたくない……）

わずかに残る自制心とは裏腹に麻衣は口を犯すペニスに健気に舌を絡めていった。

んぐ

ううん

（も……もうイキたくない）

麻衣の想いを踏みにじるかのように淫鬼は最後の「滴まで麻衣の中に放出した。

「はっ……くっ……んあ……」

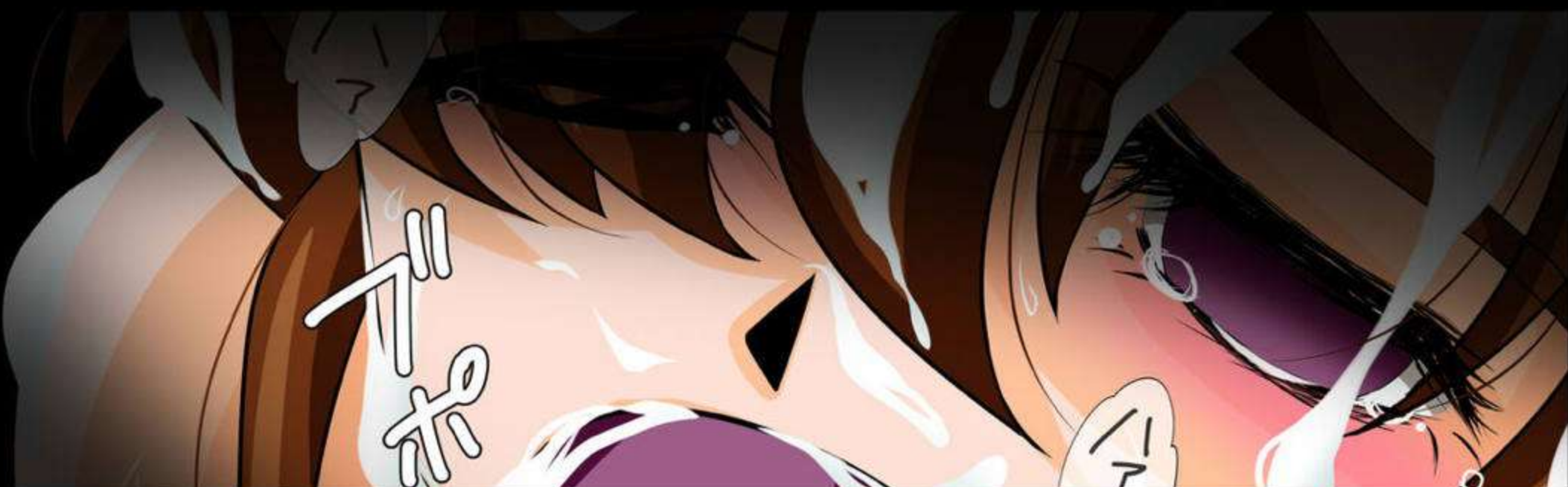
麻衣もその脈動にたまらずに高みに昇りつめてしまった。

「あ……あ……ふあ」

滴るよだれも、背中の震えも麻衣にはどうする」ともできなかった。

鬼どもは己の勃起力だけで亜衣の身体を支えてみせた。
無残な犯られ姿を晒しても、亜衣にはもはや抵抗する
体力も気力も残されてはいない。

朦朧とする意識の中で、鬼のペニスが口と膣の中にある
事だけが認識できた。
鬼のチ■ポへの絶対的な敗北感が亜衣の脳裏に刻み込
まれてゆく。





は
う

二体の淫鬼が麻衣の両穴を犯していた。
二つの巨体にサンドイッチにされ、逃げ場のない
衝撃が麻衣の全身に叩きつけられている。
声を出すこともままならない。

う
は
あ
あ

麻衣は厚い胸板に胸を押しつぶされ、自分の倍ほども
ある腰を前後から打ちつけられていた。
少しでも衝撃をやわらげるために腰の角度を合わせ
ようとしたが、前後のピストン運動のリズムが違う為
上手くいかない。
それが無様な腰振りに見えたのか、鬼どもは狂喜して
腰のピッチを上げるのだった。

ズ
ン
ズ
ン

うあああ

麻衣い

あん

耐えてえ

はあん

うあ

くうう

ああああん

イクウ

ちゅ ぬちゅ

ちゅ ぐ

あん
はあん

麻衣い……
お願い……そんな声
出さないで……

やああ
んああ

も……もう
あたしも限界……

うあああ

イクイクイク

ダ……ダメよ！
麻衣い！
はあああん！

はああああ

イツちやうじう

ず
ず
ず

ず
ず
ず

じゅ
びゅ
びゅ

ぽ
ぽ
ぽ

カーマ淫邪王編

「ハーハッハー！ついに亜衣を犯してやったぞ！」

亜衣は守り続けてきた処女を散らされた。

無論、カーマがその一発で終わるはずもなく、亜衣は何度も何度も犯された。

両腕を縛られ、ろくな抵抗もできないままに、体の奥に精を放たれる。おぞましい感覚に身を震わせながら、亜衣は最後の希望を思った。

(…麻衣だけは…守りたい)

しかし、もはや手段がない。

カーマは幾度目かの射精を終えた後、精液まみれのペニスをようやく引き抜いた。

(ま…いい…)

息も絶え絶えの亜衣。その想いを知ってか知らずか、カーマは意味ありげにニヤついて亜衣から離れ、麻衣に襲い掛かった。



すでに麻衣は淫ら木馬によって、処女膜を破られ、尻の穴まで貫かれていた。

膨大な淫力を宿した木馬の二穴責めに、感じやすい麻衣はあつけなく絶頂に導かれてしまう。

カーマから逃れようとしても、腰に力が入らない。わずかに後ずさるのが精一杯であった。

麻衣はたやすく組み敷かれ、大きく股を割られた。

「い、いやっ……ああ……」

亀頭がピンクの花びらを押し分け、一気に突き込まれる。

「ああああああーっー」

「おおおー！これが麻衣か！」

カーマは股間で爆発する快感に酔いしれた。

「何と！亜衣に勝るとも劣らぬホトである」とよー！

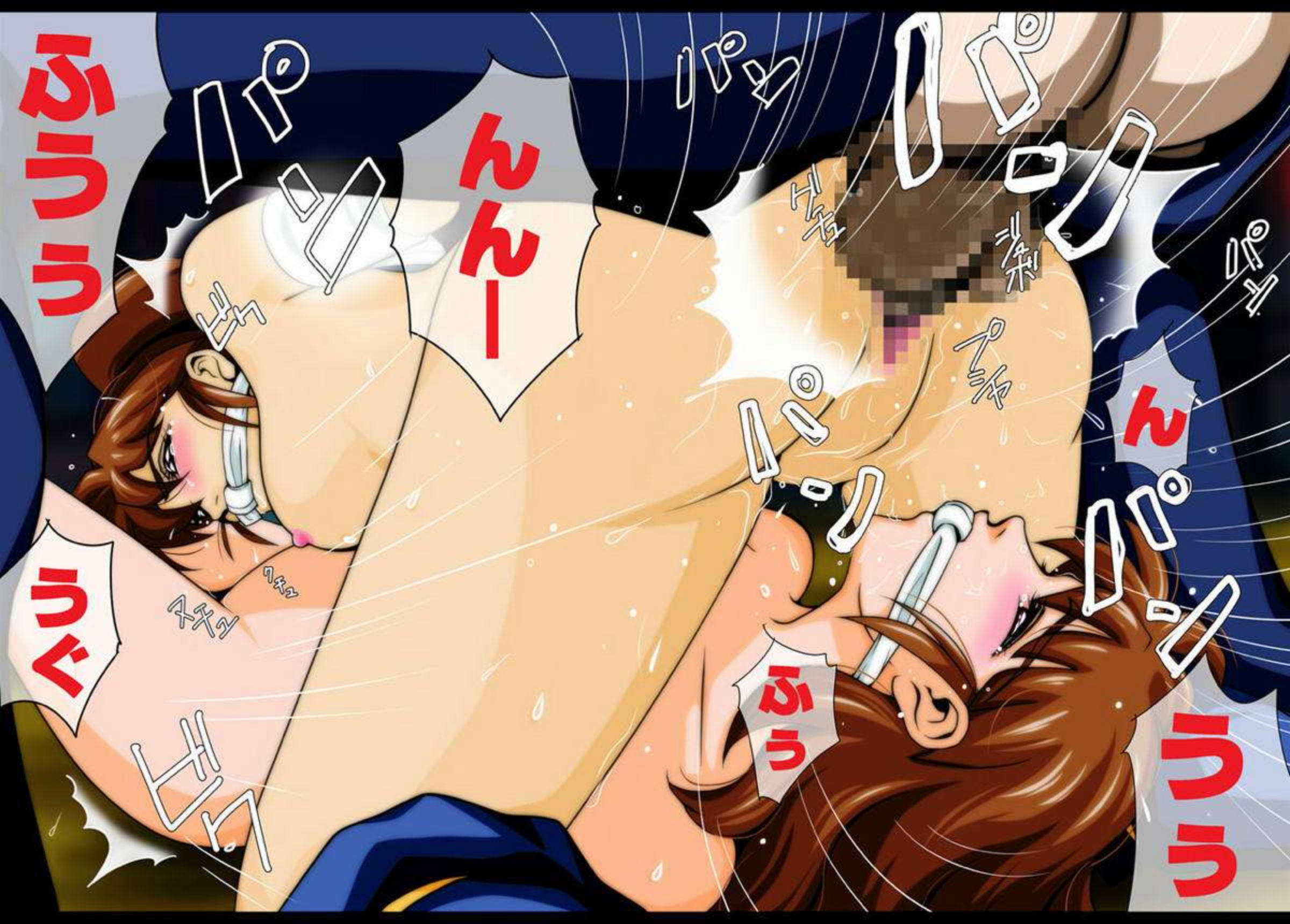
激しいピストン運動が麻衣を襲う。狂喜するカーマが自分に覆いかぶさって、腰を振っている。

木馬とはまた違う、麻衣にとって初めての「男とのセックス」であった。

はあん

あん





ふー
うー
うー

ん
ん
ー

ふ
ん
ん

ふ
う

ん

う
う
う

信じられない光景だった。

『麻衣よーよおーく見ておくのだぞー!』

麻衣のすぐ目の前にあるのは、たっぷり濡れた姉の
膣口とカーマのいきり立った肉棒。

カーマは亀頭でぬちゃぬちゃと亜衣の入り口をまさ
ぐり、狙いを定め、ゆっくりと圧力をかけた。

（お姉ちゃん!）

亜衣の肉ビラがにゅうっと広がり、大きなペニスがぬ
るりぬるりと入ってゆく。

亜衣の声にならない悲鳴が響く。

麻衣は息をするのも忘れ、徐々に入ってゆく男性器
に見入っていた。

やがて二人の腰がぴったりと合わさった。

（あんな大きなオチン●ンがお姉ちゃんの中に……）

カーマは亜衣の膣奥にペニスを収めたまましばらく
動かなかった。

（……お姉ちゃんの中に、入ってる……）

ペニスを膣に十分に馴染ませた後、カーマは
ゆっくりとした動きで引き抜き始めた。

耐えがたい屈辱とそれを上回る快感に亜衣
の尻は震えていた。

現れた肉棒は亜衣の愛液でぬらぬらと濡れ
光っている。

再びペニスが濡れそぼった膣にねじ込まれる。

恥ずかしいほどの水音ともにピストン運動が
始まった。

（やだ……、す……すごい……）

噴き散らされる愛液を浴びながら、麻衣は
腰をくねらせた。

あたかも自分の膣にカーマのペニスが挿入さ
れているかのような錯覚に陥っていた。

すぐ目の前で繰り広げられる男女の交合に麻衣はゴクリと生唾を飲み込んだ。

その瞬間、麻衣はビュルルルルという音を聞いた。

（お姉ちゃん……出された！）

亜衣の身体がビクビクと痙攣している。

出しながらカーマのペニスはピストンを続けた。

洪水状態の亜衣のアソコの奥では、カーマの精液の奔流が逆巻いていた。

（お姉ちゃん……）

（ごめんなさい……わたし……もう……）

互いの想いが伝わり合う。

亜衣の腰がおずおずと動き始めた。

さらにペニスを咥え込もうというのか、それとも

膣のいい所にもっとこすり付けようというのか。

亜衣の泣き濡れた瞳が訴える。

（お願い……、もう、許して……、狂っちゃう……）

ポタツ……ポタポタポタ……ポタ

（……あ、熱い！）

麻衣の顔面に垂れ落ちてくるのは、湯気が立つようなカーマの精液。

……と、姉の本気汁のブレンドだ。

二人して互いに性器を擦り合わせて、練り上げた恥ずべき濃厚エキス。

その熱さ、その匂いを麻衣は生涯忘れないだろう。亜衣とカーマの結合部からは、さらに白濁のエキ

スが漏れ落ちてくる。

姉の肉ビラが、その奥の膣がエグっている。

（お姉ちゃん……イッてる……）

カーマの肉棒の脈動。

（まだ……出てるんだ……）

繋がったまま互いに求め合うかのような性器の蠢き。麻衣はいつまでもその結合部から目を逸らすことができなかった。



（あああ……ダ、ダメエ……）

麻衣の脳裏には、鬼獣淫界で受けた
数々の凌辱行為がよみがえっていた。

（どうしよう……私……）

両手の指の動きが激しくなる。

（エッチなコト……なっちゃったよう）

愛液はアソコから太ももまでをぐっ
しよりと濡らしていた。

淫靡な水音が高まってゆく。

（あ……、ああ……、イク……）

麻衣は腰をクネらせて身悶えた。

はう

あん

んっ

ぐん

りゅ

ちゅ



スタジオオワルツ様いつもお世話になっております。
色々複雑な事情で新刊が滞っておりますが、
久しぶりに（二穴をコントローラー化され
敏感なツボにうまく淫らコマンド入力されるたび
強制絶頂ゲージが溜められて連続絶頂させられ
抵抗力ゼロ寸前に追い込まれてしまう）
亜衣と麻衣を描くことができてとても幸せでした。
続編を出せるには
今少し時間がかかってしまいそうですが、
必ずや聖戦の最前線に戻って来ます！
それまでがんばってください
とにかくできる限り応援させていただきます！
またコミケ後に新橋で飲んで姉妹の魅力を
語り合える日を心待ちにしております。

千本トリンイ



この度はSTUDIOWALTZ淫獣聖戦天津姉妹陵辱本を手にとって頂き誠にありがとうございます。千本トリイ様、ステキ原稿を頂き、ありがとうございました！千本さんの次の新刊が発行されるその日まで最前線でお待ちしておりますよ！ポンポコ様、姉妹部屋で公開されておりました淫蛸、イラスト化のお願いを快諾頂き、ありがとうございました。使わせて頂きました！また、コミケ準備会の皆様、このコロナ禍での冬コミ開催、本当に本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。最後に淫獣聖戦ファンの皆様。本年も大変お世話になりました。ありがとうございました。来年が皆様にとって素晴らしい一年となりますよう心からお祈り申し上げます。それでは、また、お会いできる日を楽しみにしております。

発行者:STUDIOWALTZ Mail:studiowaltz@yahoo.co.jp 発行日:2021/12/30
印刷所:丸正インキ有限公司

イラスト集(文章・セリフなし)







